

市民研会員から寄せられた

2017年 私のおすすめ 3作品

締め切り 2018年2月19日、到着順に掲載

● 杉野実

1◆ ジム・ヘンリー『おいしい数学』（岩波書店）

アメリカの本を翻訳したもの。英語原版のタイトルを直訳してみましょう。「プリンの証明:数学者と料理人とあなたに共通すること」。英語圏のことわざがもとになっているので、わかりにくいでしょうか。ちなみに日本版の副題は「証明の味はパイの味」、これでわかりやすくなりましたかね。すごくかわった本です。だって数学の話と料理の話が、ほとんど関連づけられることなく、いや「どちらも著者の好きなことだから」というだけの理由で、雑然とならべられているのですから。パンやピザ生地、あるいは「ベジタリアンバーガー」を自作するという内容から、料理にある傾向を読みとることができますが、かならずしも偏屈なものばかりではなく、もっと手軽にできる料理もいろいろのっています。数学のことをいうと、著者の専門である「数理論理学」って、秋山仁さんらの「離散数学」に意外に近かったりするのかな、なんて感じがします。「ナイスな有限集合」に関する議論から、「真部分集合」という概念がもつ逆説的性格をあきらかにするところなど、いかにも論理学者の真骨頂ですが、その同じ著者が、たとえば「まよわず進めば絶対勝てるゲーム」などを熱っぽく、しかし論理的に語る、その辺のノリが秋山さんににていると思うのですね。

2◆ 谷岡剛史『もうひとつのチェコ入門』（産業編集センター）

「産業編集センター」ってあまり聞かない書店名ですよ。なんでも企業の社内報などを手がける会社だそうです。本書をふくむ「私のとっておき」は、「とにかくこの国が好き!」という人々が作った本を集めた、かなりユニークな叢書のようなのです。でこの著者ですけど、チェコ語は全然ダメなくせに同国の雑貨が大好きで、神戸に店まで開いちゃった、と。ところでチェコなど旧共産圏といえば、「暗黒時代からぬけだせてよかったね」か、あるいは逆に「資本主義でカネまみれになって、むかしのよさがなく

なったんじゃないの？」か、いずれかの論調になりがちと思うのですが、本書の立場はどちらでもありません。雑貨が好きというだけで、チェコの社会には興味がない？…とんでもない！ソビエトの統制下であってまともなもののづくりもできなかった時代を知る人々はまた、自由競争が往々にして外国資本の支配をまねくことをちゃんとみぬき、社会主義時代にも完全に死にたえはしなかった高品質工業の伝統を、いままた守ろうと奮闘していると著者も力説しています。チェコには「共産アンティーク」の店がまだ少ないとか。その理由まで読者に想像させる著者は、マニアらしからぬ(?) あたたかいまなざしを同国にそそいでいると思います。

3◆ 井澤壽治編『座敷唄集成』(東洋書院)

この著者も結構かわった人です。大阪は「西区新町」のお茶屋出身で、「華麗な花街の空気を一杯吸い、聞こえてくる座敷歌を子守歌として成長された」ということですから、はっきりいうと「遊び人」だったのじゃないかな。「上方文化研究者」を名乗り、「上方芸能サロン」を運営したすえに、70 近くなつてめでたく大学に特別研究員として招聘されましたが、本書が遺作となってしまったのはおいしいことでした。さて、古くは江戸中期(18世紀)の端唄・小唄から、新しくは1960年代の『松ノ木小唄』あたりまでを網羅したこの本を読むと、近世から近代・現代にかけて、大衆音楽がどのような発展の過程をたどってきたのか、その一端がよくわかります。農漁村の民謡をひとまず別とすれば、近世の都市では花街がほぼ唯一の流行の発信地だったのですが、近代に入ると、映画やラジオやレコードなど、そう、「マスのコミュニケーション」を前提とする媒体が、大きな地歩をしめるようになったのです。『鴨緑江節』や『白頭山節』など、軍事的・経済的な「外地」進出を背景とする曲が戦前には少なくなかったことも、わすれてはならないでしょう。『ツレーロ節』や『めんこい子馬』のかえ歌…ああ、その歌詞は紹介することができません、ここでは！

● 吉岡寛二

今年は、すべて歴史関係になりました。私自身の関心が、ますます歴史中心になっていることを示しているのかもしれませんが。

1◆ 先生も知らない世界史（玉木俊明著、2016 年 10 月、日本経済出版社）

この本を読み始めて、いきなり「狩猟採集生活から農耕生活への移行は、人類史上最大の謎の一つ」と書かれているので興味を引きました。アフリカから連れてこられた黒人奴隷は、南米特にブラジル行きが圧倒的に多かったということも全く知りませんでした。植民地主義、資本主義、帝国主義などを、世界経済史の視点から分析しています。「先生も知らない世界史」という名に違わず、一つの視点からの分析として、一読の価値はあると思います。

世界史概説という意味で『『全世界史』講義Ⅰ・Ⅱ』（出口治明著、2016 年 1 月、新潮社）には、出口氏の博識ぶりには驚きました。専門家ではない素人だから全世界の五千年史を書けたのでしょうか。

2◆ 憲政記念館（東京都千代田区永田町）

作品ではないのですが、一度は訪問されることをおすすめします。国会議事堂のすぐそばにあるのですが、明治維新から、現在の日本国憲法までの資料などが展示されています。日本国憲法の改憲論議がされている昨今、帝国憲法と現憲法の制定過程を含めた歴史を知ること大切だと思います。特に、平成 29 年 6 月から平成 30 年末まで、シリーズ 4 期に分けてロングラン特別企画が開催されています。私が訪問したのは 11 月ですから、シリーズⅡ（戊辰戦争から議会開設まで）平成 29 年 11 月 1 日（水）～平成 30 年 3 月 29 日（木）でしたが、大日本帝国憲法が制定される経緯が詳しく説明されていて、いい勉強になりました。

3◆ 沖縄戦における写真

数か月前までは研究所を一番にするつもりだったのですが、研究所は閉館になったけれども、そこで販売されていた写真集を購読していたので 3 つ目にしました。

沖縄那覇港の近くに、NPO 法人「沖縄国際平和研究所」というのがありました。旧沖縄県知事の太田昌秀氏がずっと理事長をしておられたのですが、昨年六月に亡くなられて、研究所は九月末で閉館されました。太平洋戦争中に米軍が撮った写真を、これほどたくさん展示しているところはありませんでした。一昨年、昨年に続いて、今年も立ち寄るつもりだったのですがとても残念です。

そこでは何冊かの本を販売していたのですが、「これが沖縄戦だ 写真記録」（大田昌秀編著、初版 1977、那覇出版社）を昨年は購入して読みました。ウィキによれば初版は琉球新報社のようなのですが、私が購入したものは、30 刷、2013 年改定版、那覇出版社です。戦争の悲惨さを、真摯に淡々と伝えるものが、少しずつ風化しているのは寂しい限りです。

● 鈴木綾

1 ◆オペラシアターこんにゃく座公演 オペラ『スマイル—いつの日か、ひまわりのように』

台本 鄭義信 作曲 萩京子 演出 立山ひろみ

名古屋のオペラグループ「うた座」のために1997年に創られたオペラを20年後の2017年9月、萩京子が座付作曲家を務めるオペラシアターこんにゃく座が新演出で上演した。鄭義信&萩京子のこんにゃく座のオペラといえば『口はロボットの口』が最初に思い浮かぶ。パン作りしかできないロボットのテトとパン屋の女の子ココの愛と冒険の物語。ココは父と二人暮らしで、高利貸しの悪党と必死に戦っている少年のような少女。その後の『まげもん』、『ネズミの涙』にも現れるボーイッシュでいじらしい娘。その原点がここにあった。

『スマイル』の主人公は、自分は本当は月のウサギなんだと思っている女の子、ぼたん。戦時下の小学生女子として、いつか飛行機乗りか、男の子になりたいと思っている。父は出征して行方不明・・・母は病身。思うに任せない毎日、ぼたんは金髪のハーフの少年ケントといつも浜辺で遊んで過ごしていた。ケントは学校でもいじめられていて、祖父は町にいては殺されてしまうかもと学校にも行かせず、屋敷に閉じ込めることに・・・。会えなくなるとわかったぼたとケントは同じ時間に月を見上げてお互いを思い出そうと約束する。ケントが教えてくれた「スマイル」は希望のことば。しかし戦況は悪化の一途を辿る。級友は疎開していく。母は帰らない夫を想い、なぜ「万歳」と送り出したのかと独り悔いている。その挙句の空襲の夜。何もかもが焼かれ、燃える中を逃げ惑う人々。こだまする「万歳」。その形のまま、死んで行く人々。「万歳！万歳！」（そうか、あれはお手上げの形なのだ！）母がぼたんに叫ぶ。「中州まで死に物狂いで泳ぎなさい！」一人じゃいやだというぼたんを川につき落とす母。後から行くからと言った母とはぐれ、ケントと遊んだ浜辺でケントに出会うぼたん。思わず駆け寄るが、ケントの青い顔、冷たい体に驚く。ケントは閉じ込められた屋敷から逃げ出せずに死んだのだ。

戦後のぼたんは旅芸人をしている。人気漫才師を目指すユリとドクダミとボタン、三人揃って「サマーフラワーズ」！うまくいかないコントも仲間割れも乗り越えて街から街へ。必死で「スマイル」を追いかけるぼたん。ケントは今もぼたんの胸の中にいる。

萩京子さんもインタビューで語っているが、この作品にはその後の鄭義信&萩京子のこんにゃく座のオペラのエッセンスが詰まっているようだ。主人公の設定だけでなく、『口はロボットの口』の泥棒市場の3人組を思い出すようなサマーフラワーズ。ムダにオカシイ異様なオネエサンたち。大笑いしながらその底の凄味と生真面目さが響いてくる。ケントを忘れないぼたんの願う「スマイル」。私たちはケントを忘れてはいないか？ 万歳を叫んだ後悔を忘れていないか？

私はこんなに悲しい苦しい「万歳」を聞いたことはなかった。もう聞きたくない、私は万歳したくないと心底願う。たくさんの母や妻や子どもたちがお手上げになった時代を繰り返すな！

そんなコトバはどこにも出てこないけど、20年前よりも「万歳」がそこに近づいている気がするから・・・私たちは「笑うために生きている」と言いたい。

2◆人形劇団ひとみ座『岸辺のヤービ』

8/25(金)、横浜の県民共済みらいホールにて上演。人形劇は久しぶり、大好きな原作(梨木香歩・作／福音館書店)に、脚本がいずみ凛さん、これは行かねば!と出かけました。原作では架空の生物ヤービたちがすごくリアルにかつカワイク描かれていた(挿絵:小沢さかえ)分、人形には過度の期待はするな...と思っていたのですが、原作のイメージそのままのステキな人形たちが実にイキイキ「暮らしている」舞台。人間が出る場面、片手遣い人形の場面、棒人形やペープサートと場面展開でうまく使い分け、背景の映像も人形たちとトーンがつながり、違和感なく、とても美しかった。

マッドガイド・ウォーターという三日月湖のほとりにある寄宿学校の先生「わたし」は休みの日にはボートをこぎ出して湖上のひとときを楽しむのが好き。「わたし」も子ども時代、この学校の生徒だったので、このあたりは自分の庭のようなもの。しかし、水量が減ったり、生物の様相が変わったり、感じることはいろいろあった。ある日、二本足で歩くハリネズミのような、小さくて賢いヤービに出会う。ヤービの種族には「大きい人」(人間)は信用ならない危険な生物。身を隠して生きてきたのに友達のセジロのことで心を痛めていたヤービは周囲への注意が落ちていたのです。怯えて固まっているヤービに「わたし」はその時、口に入れようとしていたミルクキャンディをそっと差し出します。いい匂いの食べ物を渡され、ヤービは喜びます。後日、律儀にお礼に現れたヤービに「わたし」はヤービたちの暮らしを語ってくれたらそれが一番のお礼だと伝え、この「物語」を聞くことになったのです。なぜ、生物は食べなくては生きていけないのか、ほかの生物の命を奪ってまで生きることが正しいのか、それは深く重いテーマを、ヤービの友達セジロは思いつめ、絶食していたのでした。体が弱り、このままではどうなることかと心配していた時、「わたし」にもらった「ミルクキャンディ」を溶かしたミルクでセジロは命をつなぎます。誰の命も奪わない食べ物があれば...とヤービは一所懸命考えます。誰もがその命を全うできる生き方をするにはどうしたらいいのか...。小さな人にはとてもむずかしいテーマの人形劇。会場は「学童保育」の夏行事で来ていた小学生でいっぱい。にぎやかな休憩時間、「なんだかつまんない〜」の声も...。そうかもね、ハラハラドキドキの冒険活劇ではないからね。でも、これからミルクキャンディ食べる時、きっと思い出すと思うよ。どうしたら誰もが、誰の命も奪わずに命を全うできるか、考えているヤービのことを。「みんな、がんばれ。」ってつぶやく小さな不思議な生物を。

3◆柳家小三治独演会 11月11日 @志木市パルティ

夏頃から体調不良でしばらく高座を休んでいた小三治さん。認知症の初期らしいと聞いてドキドキしつつも会場へ。最初の驚きは、前座がなんと三三さん!会場どよめき。最後の直弟子さんは小三治さんのフォローをするのがお上手なのかも。中入り後に手品もあり、小三治さんの噺は2つ。77歳。正座イス使ってお茶飲みながら、ゆったり...あまり体の具合はよくないのかな...でも、気持ちはお元気だった!どれもすごくいい話だった。

三三「しの字ざらい」 小三治「転宅」 小三治「宗論」

軽妙な枕も健在。永六輔氏と一緒にしていた柳句会で、永さんが選んでくれた小三治の俳句「柄を軸に 銀杏の落ち葉 くるくると」。12人いた句会仲間、今残っているのは2人と...

フランク永井の持ち歌だったという秋の歌『公園の手品師』も披露もしてくれた。毎年秋には歌うそう。
やはり銀杏の歌。「呼んでおくれよ、幸せを、銀杏は手品師、老いたピエロ」ステキ♪
加計学園のことは怒ってた！お茶目なところは変わらない。怒ると血圧上がるんだなんて笑って。

三三さんが言うとおり、落語家は前座・二つ目・真打ち・名人の次が「ご臨終」だからね。最後まで高座に上がるんだろうな。絶対にまた会いに行きます！共に笑える喜びを味わいに。

● 上村光弘

1 ◆ 映画「ドリーム」セオドア・メルフィ監督、日本での劇場公開 2017 年

1960 年代初頭、米ソが宇宙開発計画でしのぎを削っていたころ、NASA のラングレー研究所で計算手として働いていたキャサリン、メアリー、ドロシーという 3 人の黒人女性のお話。なかでも天才的な数学の才能をもっていたキャサリンは、宇宙特別研究本部に配属されるが、そこは白人男性ばかりの職場で、黒人女性ということでことごとく差別を受けるが、粛々と仕事をこなしていく。そこには黒人専用トイレがなく、約 1 キロ離れた黒人専用トイレに駆け込む。トイレ休憩時間が長すぎることをとがめる白人男性の所長に、さすがに我慢できずにキャサリンは事情をぶつける。するとやおらハンマーをかついでいった所長が「ションベンの色はみんなおんなじだぁ〜」と、トイレの Colored の表示を叩き壊す。痛快!!

キャサリンはトラブルがあったロケットの軌道を計算して修正させ、飛行士（つい先日亡くなった宇宙飛行士ジョン・グレン！）の無事帰還の成功を導いた。管理職になりたいメアリー、エンジニア志望のドロシーもやはり黒人女性という差別待遇を受けるが、その「壁」を自らの才能や方法で壊していき、見事、夢をかなえ、つづく黒人女性たちへの道を拓いていった。原作のタイトルは『Hidden Figures（隠された姿）』という。自らの力で姿を現した黒人女性たちはなんとかこよかったことか！

2 ◆ 名古屋港水族館

ここにはサンシャイン水族館で見ることができなくなったチンアナゴがいる。

それだけでも一見の価値あり！

時間不足で全部見ることができなかったの、また行ってみたい。

3 ◆ 岡田 美智男（著）『〈弱いロボット〉の思考：わたし・身体・コミュニケーション』講談社現代新書、2017 年 6 月、800 円＋税、264 ページ、ISBN 978-4-06-288433-4

お掃除ロボットの「ルンバ」は壁にコツンとぶつかったり時間はかかるけれども、いつの間にか部屋をきれいにしてしまう。また、「ゴミ箱ロボット」は人の手を上手に借りながらゴミを集めてしまう。

半身マヒになってしまった僕が、人間だってひとりで生きているわけではないと気づかせてくれる本。

● 石坂信之

1 ◆宮正樹、新たな魚類大系統---遺伝子で解き明かす魚類 3 万種の由来と現在、慶應義塾大学出版会、2016 年

宮正樹さんの単著となる初めての本です。遺伝子を調べて魚類の系統分類を探求するという、若い学生を意識した専門向けの内容ではありますが、私が長い間知りたかった謎を解き明かしてくれました。今回は、マニアックな謎話だけをご紹介します。

ご存じの方もいると思いますが、ニホンウナギは数千キロ離れたマリアナ諸島西沖で産卵し、孵化した仔魚が海流に乗って育った場所に戻ってくるのです。なぜそんな行動を取るのかは謎だったのですが、遺伝子解析でウナギ類の全系統を探ってみると、共通祖先は外洋の中・深層から淡水へと成長の場を移していったと考えられたのです。子育ては、外洋の中・深層の外敵が少ない最適な場所で行い、成長期は陸上の栄養が多い沿岸域で暮らすという戦略だったと解釈できるそうです。生態学的には解明されていませんが、進化の歴史がニホンウナギの行動に今も刻み込まれているのかもしれません。

また、絶滅も心配されている日本メダカには、キタノメダカとミナミメダカの 2 種がいて、外見上の違いはわからないそうですが両種の遺伝子を調べるとその違いがかなり大きく、両種の分岐がおおよそ 1800 万年前であったと考えられるそうです。一方、地史では日本列島が大陸から離れ、2 島に引きちぎられ分離し、おおよそ 1500 万年前に現在の日本列島の位置になったとしています。2 島になる前の地続きの時は同じ種のメダカだったのですが、おおよそ 1800 万年前に北方の生息地が孤立して、両種が独自に進化してキタノメダカとミナミメダカになったことになります。この本とは別の資料で両種の生息地分布を見ると、地史でいう日本列島の 1500 万年前の陸域にまさに重なるのです。その後、周囲が陸化して 2 島はつながり今の日本列島になっていくのですが、両種の分岐がおおよそ 1800 万年前という結果は驚きなのですが“おたく”喜びでしょうかね？（注、1500 万年前とか 1800 万年前には誤差があり、ほぼ同時代と言って良いと思います）

2 ◆鎌田浩毅、日本の地下で何が起きているのか、岩波書店、2017 年

鎌田さんの授業は抜群の人気だそうです。専門の火山のみならず、地震関係の本も多数書かれていますが、類書の中から敢えてこの本を取り上げるのは著者の気持ちが一段とアップしているからです。今、日本列島が「大地動乱の時代」に入っていることを”警告”しています。2018 年 1 月の草津白根の本白根山付近の突然の噴火（隣の白根山の地震観測データは本当に何も関知していなかったのか疑問を持っていますが・・・）でもわかるように、巨大地震だけが危ないのではないのです。九州の火山活動が活発化してきており、巨大なカルデラ噴火が起きないとはいえない状況になって来ています。カルデラ噴火が起こると、はかりしれない被害となって、日本の危機です。九州一円から周辺まで噴石が降り、多量の火山灰が日本列島に降り積もります（稼働中の原子力発電所が噴石の被害を免れて、うまく停止

できたとしても、その後の危機が来た後も放射性物質を冷却し続け、多量の火山灰が降り続く中で適切に保管、管理できるのでしょうか？——まず無理でしょう。国土のほとんどが荒廃し、ともかく日本列島が破局をまぬがれたとしても、借金漬けのこの国の財政で災害復興などできるのでしょうか？拙い政治、経済状況を変えて、できることをしておかなければ、破局します。鎌田さんの”警告”を甘く見てはいけません。

それから特筆できるのは“「知識」から「行動」へ”の内容で一つの章を割いています。同僚専門家たちの目が気になり、「後ろ指をさされない」説明をしても、教え子の学生からは「先生、何を言いたいのかわかりませんでした」と言われた反省から、入念に書いています。

私も長年、小学校の理科のお手伝いを通じて、先生たちとサイエンスについて話し合ってきましたが、サイエンスに関わった人達の一方的な「伝え方」では、先生方にもちゃんと伝わらないのです。自分たちのコミュニティを向いた「守りの姿勢」ではなく、受け手に合わせたアウトリーチで、受け手の行動を促すように心がけないと災害に適切に対応できないのです。この章の考えは素晴らしいと思います。誤解を覚悟で言えば、市民の受講者に講演を 1,2 時間やって、質問時間は 15 分というビジネスライクな講演など論外と思います。講師が心がけるのは専門仲間からは「後ろ指をさされない」説明であり、そのために受講者に理解しづらいパワーポイントや資料を作るという、結局のところは講師の自己満足だということになります。

3 ◆小川仁志、〈よのなか〉を変える哲学の授業、イーストプレス、2017 年

私は視聴していませんでしたが、2017 年の 100 分 de 名著 ラッセル“幸福論”（NHK E テレ）の講師をされていた小川さんの本です。若い人に「生きづらさ」を哲学で「生きる力」に変えるための授業と謳っています。話題が密教、AKB48、働き方改革などきわめて多岐にわたっていますが、敢えて深掘りしていないので軽く読めます。

その授業の 1 時間目は社会活動で〈よのなか〉を変える哲学として、NPO についての授業です。NPO が受け持つことにおのずから役割があり、強力なリーダーシップが求められているのではなく、NPO の役割の本筋は「公」と「私」を媒介する公共哲学の実践であるとして「・・・NPO も淘汰の時代だといわれますが、「活私開公」の精神を忘れなければ、NPO で社会を変えることは十分に可能なはずです。」としています。小川さんはいろいろな NPO との関わりをもち、自身も哲学カフェを実践しています。若い人に希望を与えられるのは、NPO の一員としてのやりがいであり、それにふさわしい活動と運営なのです。

● 橋本正明

1◆小倉崇『渋谷の農家』 本の雑誌社 2016年刊

タイトルを読んだだけでときっと何の事だか判る人はいないだろう。

『渋谷に農地なんぞ有る訳が無いだろう！？』

十中八九、そう答えるだろう。背表紙を見ただけの私もそうだった。

しかし、在るのだ。しかも渋谷のド真ん中に。

『！？』

そんなことは信じられる訳が無いだろう。この本を手にとってみるまでは…。

この本からは正のスパイラルが感じられる。そして農業のもたらす生の循環の輪の有り様をも知らしめてくれる。

いや、そんな御託は二の次だ。

この本はとて面白い。

読んでいてワクワクする。

ページを捲る手が止まらない。

いや、それどころではない。

読み進むにつれ、私の全ての感覚が研ぎ澄まされ、脳全体が活性化していくのが判る。

とにかく、スゴク イイ！！

実際、私は本を買った翌日の朝の通勤電車で読み始め、帰りの電車の途中で読み終わってしまった（ちなみに片道1時間少々掛かるので結構な読書時間ではある）。

素直な感想としては、もっと続きが読みたい。

できれば続きには私も登場してみたい。チョイ役でもいいので…。

この本はイイ。

私が今年（2017年）読んだ本の中で間違いなく、最っ高に面白い本である。

2◆TVドラマ『脳にスマホが埋められた！』（読売TV制作：日テレ系放映）

これは真面目に考えると十分にあり得る現在とも近未来ともつかない物語と言っても過言ではない（そうか？）はずなのだが、奥さんに逃げられ、たまに会う（いわゆる面会許可）娘には激励されるも

元妻に未練タラタラでとてもウダツの上がない主人公が、突如得た不可思議な能力で様々な（身近な）問題をその能力を駆使して解決し、人間として成長するだけでなく地球も救いかねないヒーロー、スマホマンに…（って、あれ？）。

真面目に語るのがとても困難な物語でもある（何のこっちゃ？）。

ある夜、突如として火の玉に遭遇し記憶を無くした主人公は目覚めると首筋に電源スイッチが装着され（爆笑）、スイッチを入れるとスマホの画面が起動し、様々なアプリが利用できる体にと改造されていたのである（まあ、カッコよく言えば改造人間、サイボーグなのだが全くそうは見えない…）。

そして何故かその存在を知りスマホ人間を探すヒロインに見いだされ（つーか、どちらかと言うと半強制的に協力させられ）、敵対する会社の社長、いかにもメガネの社長秘書、そして何故か様々な人生経験と人脈の広さで主人公とヒロインを助けてくれるナゾの経歴の同僚など、奇々怪々な人々が主に社内で織り成す（狭ッ！）バラエティドラマなのであった。

しかし、もう一度真面目に考えてみよう。

現在の人体とキカイとの融合のスピードは急速な電腦技術の発展によって爆発的に加速しつつある。実際に人間の思考を画像として取り出したり、直接・間接的に様々なツールを操作させる研究や、電子マネーチップを腕に埋め込むという研究すら進んでいる。それでは通信機器であるスマホが人間に組み込まれてしまうというのは十分実現可能なものではないだろうか。

まあ、でも主人公が目の前に展開するスマホの画面を大きく腕を振り回しながら（勿論、同類のスマホ人間以外には見えない）アプリを操作する姿はとってもおマヌケであり、笑いを誘う（そして主人公を務める伊藤淳史がその面白さを倍増させる）。そして企画原案はTVの様々なバラエティ番組の企画を手掛けている鈴木おさむなのであった（道理で面白い訳である）。

3◆ NHKスペシャル『731部隊』と『インパール作戦』

この世に悪名高き2つの軍事作戦は、数多ある戦争犯罪、無謀な作戦の中でもそれぞれ最たるものであろう。以前から名前は聞き知っていても、中々その実態を詳しく報告するものを視聴する機会に出会わなかったが、ようやく夏の終戦記念日の前後に集中して放映された番組を見る機会を得たのだった。

そこで炙りだされていたものは、一部の前線を知らぬ者、人を人として尊重しない者、尊厳を顧みない者が、組織の上層に存在することで、下らないメンツを保つため、かくも容易くその組織全体が狂った方向に進んでしまうのかと言う不条理な理屈。ましてや科学の名の下に平凡な研究者がナチス同様の冷酷非道な人体実験を繰り返す様は、アイヒマンのそれと同じく『無関心』と『盲目的追従』が為し得る業、それは今日の我々も陥りつつあるそれと同一なのではないだろうか。

「人が人でなくなる」とは戦争体験談としてしばしば耳にする言葉であるが、この人道から大きく踏

み外れた軍事作戦に否応なく参加させられた人々は、眼前で起こるその凄惨な場面をその両の眼で視、両の耳で聞き、その肌を感じ、死臭と硝煙の臭いを嗅ぎ、まさに筆舌に尽くし難い辛酸を舐め尽くしてきたであろう。

そして陰惨なインパール作戦を参謀本部付士官としての軍務の傍ら克明に手記に記し、今なお存命の齋藤少尉が番組最終局面で心の底から湧きあがる想いを一字一句絞り上げるような魂の叫びとも思える強い言葉を吐露するシーンが深く心に刻みつけられた次第である。

「(軍の) 上層部は人が何人死ねば(陣地が) 取れるとか、そんな計算ばかりで… (中略) それを知ってしまうと辛いです。」と…。

くしくも明治 150 年などと戦前の富国強兵時代を懐古、賛美し、平和憲法の下に培われてきた日本の高度な産業技術を軍事用に積極的に転化、骨太の産業として輸出し、世界平和を広めるところか戦火を拡大しかねないような研究活動を積極的に推進させ、反対、批判する言論を弾圧・統制するような風潮が国を挙げて行われようとしているように見えかねない今日だからこそ、我々はこれまで口を噤(つぐ)んできた者たちがその余りにも重いその記憶とその口を開き、語りだす真実により一層耳を傾けなければならないだろう。

● 角田季美枝

1 ◆本『生態学者・伊藤嘉昭伝 もっとも基礎的なことがもっとも役に立つ』辻 和希編集、海游舎、2017 年、A5 判・上製本・432 ページ、4,600 円+税、ISBN978-4-905930-10-5

伊藤嘉昭という名前をご存じだろうか。生態学者である。私は、SIPRI 編『ベトナム戦争と生態系破壊』(岸由二と共訳、岩波現代選書、1979 年)、『虫を放して虫を滅ぼす：沖縄・ウリミバエ根絶作戦私記』(中公新書、1980 年)で知った。本書は伊藤嘉昭の伝記で、伊藤の人生(1930-2015)に関わった 55 人の証言による。死後、関係者の証言などによって編集して出版される伝記は、その人の「栄光」をたたえるものが多いが、本書はそうではない。日本の戦後(とくには 1970 年代から 90 年代)の生物学ないしは生物学会の歴史を知る第一級の史料であると思う。白眉は岸由二「嘉昭さん応答せよ」。岸自身、日本では異質の生物学者とされているので、岸に原稿を依頼した編集者、出版社の英断がしのばれる。いかに自然科学の発展がイデオロギーに左右されてきたのか、いまはどうかを考える良い証言。

なお、非常に分厚く高価なので、公共図書館に入れてほしいと何館か働きかけてみたが、すべて他館からの回覧であった。大学図書館にもそう入っていない(<https://ci.nii.ac.jp/ncid/BB23370407#anc-library>を参照のこと)。このような本こそ図書館にあるべきだ。

2 ◆本『「国境なき医師団」を見に行く』いとうせいこう、講談社、2017 年、四六判、392 ページ、1500 円+税、ISBN978-4-06-220841-3

本書は作家・音楽家（その他いろいろ）のいとうせいこうが、2016 年 3 月からハイチ、フィリピン、ギリシャ、ウガンダで活動する国境なき医師団（MSF）に同行取材した記録。

Yahoo ニュースに連載していたので、全文以下で読むことができるし（最終確認 2018 年 1 月 31 日）、写真（といっても基本は写真をとらないという取材だったので枚数は少ない）を見るには[こちらの](#)ほうがいい。

ただ、私には、紙の本という「形」のほうが便利だし、読んだ気になるし、読み返しもしやすい。

いとうが見た、聞いた、考えたことが素直に書かれているので、非常に読みやすい。国境なき医師団がどのような団体でどのような活動をしているのかもよく理解できる。いとうが何度となく書いている「彼／彼女はわたしだ」という結論は、私の心にストレートに届いた。

3 ◆本『縮充する日本』山崎亮、PHP 新書、2016 年、新書判並製、1200 円+税、ISBN 978-4-569-82737-7

コミュニティ・デザインという言葉在日本に普及させたひとり、間違いなく本書の著者の山崎だ。山崎は、もともとはランドスケープ・デザインの仕事をしていたが、各地で住民参加型の地域再生のデザインを手がけるようになり、それをさらに深く学ぶために社会福祉の領域まで足をつっこみ、社会福祉士の資格も取得した。

そのような実績や実感をふまえて、高齢化・人口減少化社会の日本の未来を考察しているのが本書。そして、そのキーワードがタイトルにある、「縮充」である。

縮充とはどういうことか。まえがきには以下のように紹介されている。

「本来はフェルトなどの布生地をつくる際に使われる用語である（以前は縮絨と書いた）。毛織物（ウール等）をアルカリ性の液体の中で揉むと、毛がからまって縮みながら肉厚な生地になる。これが肌触りもよく保温性も高いことから重宝されるようになった。…（中略）…縮減でも縮退でもない。拡充でも補充でもない。縮みながら充実させて、質感が良く暖かい地域社会をつくること。いわば「少数精鋭化」する未来について考えてみたいのだ。拡大する時代の「少数精鋭」は、選ばれし者に限られた話だったかもしれない。しかし、縮充する時代の少数精鋭化はみんなが参加することを前提とする。…（以下略）」（pp.3-4、傍点原文どおり）

そして、市民参加の視点から、1 章ずつ、まちづくり、政治・行政、消費者運動、環境、情報、商業、芸術、医療・福祉、教育の各領域の歴史をひもとく、未来を構想している。

「未来志向」「働き方改革」「公共」学習など、市民運動が提案しているいろいろなキーワードが公的に喧伝されている。公が提案するキーワードの内実に対して、自分たちが検討・構想し提案し、かつ実現する力をつけることが必須と思うので、日本における市民参加の歴史をこれ 1 冊で鳥瞰できる本書は、市民参加や未来の地域社会を具体的に考える際、大変便利。参加の本丸は教育と考える山崎のヴィジョン

ンや手法の語り口は、平易で大変わかりやすい。

4 ◆映画「ヨーヨー・マと旅するシルクロード」日本での劇場公開 2017 年 3 月 シルクロード・アンサンブルについては公式ホームページもどうぞ。

世界的チェリストであるヨーヨー・マが 2000 年に立ち上げた「シルクロード・アンサンブル」をはじめとする、世界中の音楽仲間たちの活動を紹介するドキュメンタリー映画(原題 The Music of Strangers)。アンサンブルのメンバーは固定されておらず、チェロ、ヴァイオリン、ピアノ、クラリネットなどの西洋音楽のプロだけではなく、ケマンチェ、中国琵琶(ピパ)、尺八、ガイタ(スペイン・ガリシア地方のバグパイプ)などの「伝統」音楽のプロ、シルクロード各地の歌い手などが活躍している。

この映画ではヨーヨー・マ、ケイハン・カルホール(イラン出身のケマンチェ奏者)、ウー・マン(中国出身のピパ奏者)、クリスティーナ・パト(ガイタ奏者)、キナン・アズメ(シリア出身のクラリネット奏者)のそれぞれの境遇の語り、アンサンブルの音楽活動がつづれ織りのように構成されている。”顔”のヨーヨー・マはともかく、大勢のメンバーからなぜこの 3 人が選ばれたのだろうか。音楽的にもアンサンブルの活動のシンボリック存在だからだろうか。故国で演奏活動や教育活動ができなくなったケイマンとキナン、スペインでケルト文化が根づいているガリシアのクリスティーナ、文化大革命で逃れるために母がピパを学ばせたというウー。

シルクロード・アンサンブルが演奏する音楽は実に多様だ。こんな楽器の組み合わせの演奏はほかにはなく、伝統的な楽曲だけではなくオリジナル楽曲も演奏する。その中には現代音楽的なものもジャズの即興のような楽曲もある。しかし、どの楽曲もなぜか懐かしさを感じてしまうのはなぜだろう(個人的にはガイタ奏者のクリスティーナの、音楽のジャンルを軽々と超えているパフォーマンスやガイタの響きに魅かれた)。

境遇が内外の政治情勢に翻弄されているアーティストもいるが、アンサンブルで演奏している時はそのような現世のしがらみから解放されて、純粹に楽しんでいるように見える。平和とは何だろう、音楽のもつ力とは何だろうということを考えさせられる。

5 ◆CD「Babacar」France Gal、1987 年(私の手元にあるものは Wea International、2000 年)

1 月 7 日、歌手のフランス・ギャルの訃報を知った。ニュースのほとんどが代表作「夢見るシャンソン人形」となっていることに大いに違和感をもったので、私が代表作と感じているものを紹介したい。

中学生の同級生にミシェル・ポルナレフのデビューレコードを借りて以降、私はフレンチ・ポップスのファンになった。そのころのフランスでは従来のシャンソンにあきたらない若者が、プレスリー、ビートルズなどの影響を受けて、ロックに熱中していた。フランスで熱狂的に支持されていたのがジョニー・アリディやそのつれあいだったシルヴィ・バルタンだった(モーツァルトのト短調交響曲 40 番第 1 楽章に歌詞をつけてうたっていた!)。

フランス・ギャルもそのひとりだった。ただ私はその当時のギャルは好きではなかった。ユーロビジョンコンテストで優勝した時の『夢見るシャンソン人形』(作詞作曲セルジュ・ゲンズブール)や『アニ

ーとボンボン』(作詞作曲同じ)をはじめとした楽曲や歌い方などまったく好みでなかったのだ。私はピアノを弾きながら作詞作曲を手がける音楽家が好きなので、フレンチ・ポップスではポルナレフやヴェロニク・サンソンをよく聞いていた。

3 年前ぐらいだったか、何かで「ギャルはいったん引退したような時期があり、その後、70 年代半ばに再デビューを果たした」という記事を読み、再デビュー以降の曲を Youtube などでも聞いたところ、はまった。ギャルは音域が非常に狭く、はりがある美声ではないが、歌いやすいリフレインのフレーズやパーカッションを活かしてリズムカルに仕上げている編曲がとてもいい(作曲、編曲はつれあいのミシェル・ベルジェ)。

特に良かった曲を 3 つ挙げるなら、Babacar に収められている Babacar、Ella, Elle L'a、そこにはおさめられていないが Résiste である。Babacar には日本ではセネガルの赤ちゃんというサブタイトルがついているが、ベルジェとセネガルを訪れた時に、赤ちゃんを抱いている女性に「かわいいわね」と声をかけたら、「ほしいならあげるわ。連れて行って」と返されてショックを受けたのがきっかけで、つくられた曲。Ella, Elle L'a の Ella はエラ・フィッツジェラルドでエラへの讃歌。Résiste は社会のさまざまなしがらみに縛られている女性に「抵抗するのよ!」と励ましている曲だ(歌詞のフランス語は翻訳サイトで見るできるので、検索してほしい)。ベルジェに出会って、自分が歌いたい曲をようやく歌えるようになったし、それはとくに女性の絶大な支持を得たという。

ただ、その後、つれあいのベルジェを心臓発作でなくし(1992 年)、愛娘のポーリーヌも難病で見送った(1997 年)。それ以降、実質的な引退状態がつづき、フランスとセネガルで半年ずつ暮らしながら、若い世代のプロデュースを時々手掛けていたそう。近年、乳がんが再発して闘病していたとのこと。ベルジェが生きていた時期の、輝く笑顔での活躍を忘れないでいよう。合掌。

これらの曲は Youtube で見ることができる。おすすめは以下のライブバージョンだ。曲ごとにセレクトできるようになっているので、ぜひ Babacar を見てほしい(約 10 分)。セネガル出身と思しきパーカッション・グループが途中アドリブで盛り上げていて、すごく胸がすく。

※"Le Tour de France 1988" HD LPR remastering (concert complet stéréo HQ)

● 白井基夫（医療生協さいたま職員）

1◆ 石井彰／著『エネルギー論争の盲点 天然ガスと分散化が日本を救う』

（NHK 新書、2011年7月）

3.11 直後に出版された。昨年、弁護士である河合弘之監督の最新作として映画『日本と再生 光と風のギガワット作戦』が制作され、その概要を知り、各地で公開されていることに危機感を抱いて再読した（映画は見ている）。

まず、自然エネルギーが原発に代わることはできない、ということをはっきりさせておかないといけないだろう。しかし、自然エネルギーも決して「無力」ではない。その可能性と限界を知ることが大事なはず。

現状の法律では、自然エネルギーによる発電設備が国土の約12%を占めるまで展開し、ソーラーパネルは緑化設備とみなす、という問題点もある。とくに、鉛やカドミウムなどの危険物質が含まれる設備もある。溶け出す心配はないのか、廃棄はどうするのか。設置の際、大量の除草剤が環境にばらまかれるというし。大規模な自然破壊。

くわえて、自然エネルギーは新しい「利権」であり、実は3.11前からスタートしていたこの政策に群がった連中がいる。その一人の名前が、上記映画では「企画・監修」に見ることができる。自分からみれば「隠れ原発再稼働推進派」以外の何者でもない。自然エネルギーは「原発とセットだから成立する」点を十分承知のうえでのことだろう。

結論からいえば、日本のエネルギー問題はガスによって解決される。というより、ガスによってしか解決できない。そう考えるにいたった1冊。

広瀬隆／著『原発ゼロ社会へ！ 新エネルギー論』（集英社新書、2012年11月）もあわせて読むとよい。

2◆ 坂井建雄／著『東大講義録 医療職をめざす人の解剖学はじめての一步』

（日本医事新報社、2013年）

私たちは、自分の体について、どれくらいのことを知っているだろうか。

ある先生から、腔腸動物をモデルに、ヒトの原型も「口と肛門と腸」から構成されており、脳がない動物はいても腸のない動物はいない、と聞いた瞬間、脳内で「！」のマークが光った気がする。これは、口腔衛生の基本的な考え方でもある。糖尿病や心臓病は、歯周病と深い関係にある。

さて、この本、講義録だけあって、読みやすい。坂井教授の質問がいい。

声帯・喉頭のところで、「バイオリンのような弦楽器で、高い音を出すにはどうしたいか」。

腎臓のところで、「糸球体と尿細管の2段階で尿を作るが、どちらがより重要か」。

生殖器のところで、「他の器官にはない特徴は」。

脳のところで、「脳室の外にあふれ出した脳脊髄液はどこへ行くか」。

下肢のところで、「その役割は何か」「歩いているとき、膝関節にかかる荷重はどれくらいか」。

随所での確な質問を投げかけながら、特徴的で本質的なそれぞれの構造・機能に迫っていく。実にスリリングだと思う。

カラーの解剖図鑑を開きながら、子どもといっしょに学ぶ楽しみもありそうだ。自然科学に、まさに自然と親しむことができるようになるだろう。あわせて、同じ著者の『人体解剖の実況中継』（技術評論社、2010年）もすすめたい（ほかにも、たくさんの興味深い本を書いているが）。

なお、坂井教授、昨年には医学書院から『標準解剖学』を上梓している。医学書院から「標準」と名づけられた専門書を出すということから、学識の高さがわかる。しかし、看護学校でもわかりやすい授業ができるというのが、坂井教授のすごさだと思う。

3◆ 佐藤優、高橋巖『なぜ私たちは生きているのか シュタイナー人智学とキリスト教神学の対話』（平凡社新書、2017年）

学生時代から、ルドルフ・シュタイナーの翻訳書・解説書を読んできた。そのいわば神秘思想（見えないもの）は現実の生活（見えるもの）と対応し、宇宙のなかで自分がどういう存在かわかるかもしれない、という気にさせてくれた。結局、学びを深めず、表面的にシュタイナー教育やオイリュトミーを知る程度で終わってしまった（よくあるパターンだが）。

のちに、それらの著者・翻訳者である高橋巖氏と会う機会があり、「この人こそシュタイナーそのものだ」と直感し、感激した。高橋氏は若くして大学教員の職を辞しているが、それは「シュタイナーを研究して給料をもらっていることに疑問を感じたから」だった。

また、後日、ふたりで会う機会もいただいたが、ワーグナーの楽劇『トリスタンとイゾルデ』で、ふたりがそれぞれ「もはやわたしではない、わたしはもうあなただ」と「溶解」していくことの意味について解説していただいたことは、一生、忘れないだろう（しかし、当時の自分はこの作品を完全に把握できていなかった）。大杉栄の現代性、リヒャルト・シュトラウスの音楽とその同時代の美学などについても語っていただいた。

学生時代に読んだ20世紀ドイツ思想のある概論書では、シュタイナーの思想はオカルトと、バッサリ切り捨てられていた。それを書いたのは生松敬三。マックス・ウェーバーやカール・シュミット、オルテガ、クロード・レヴィ＝ストロースなど、実に幅広い翻訳をやっていた碩学だっただけに、いっそう残念な気がしたものだ。

余談ばかりになったが、『なぜ私たちは生きているのか』全3部の構成だけ紹介しておきたい。この程度では参考にならないかもしれないが、これほど概要を紹介するのが難しい対談本も珍しい。

-
- 1 国家 一人ひとりの時間と空間の共同体
 - 2 資本 お金と働くこと
 - 3 宗教 善と悪のはざままで
-

◆番外編◆

(その 1)

『図書』岩波文庫創刊 90 周年記念「私の 3 冊」(岩波書店、2017 年)

200 人以上の方が紹介している。これを読むだけで、どれほど勉強になることか。

(その 2)

昨年、いちばん聴いた回数の多い曲は、スメタナの『わが祖国』だったかもしれない。偉大な曲だと、これまで認識できなかったのか。むむむ。

そして、それまで、小林研一郎がチェコ・フィルを振った『わが祖国』の DVD が 2 種存在するのを知らなかった。1999 年盤にはドキュメンタリーがついている。コバケンが自分らしい演奏をしようと思ったが、チェコ・フィルに協力してもらえなかった、でも、オケにこう話をして理解してもらい乗り越えた、と語っている。そういうことが演奏にも出ているのか、涙が溢れ出してくる名演。2002 年盤も、「プラハの春」における堂々たる名演。

意外なことに (?)、アーノンクール&ヨーロッパ室内管弦楽団の映像もすばらしい。

●上田昌文

1◆『花森安治 〈常識〉を〈非常識〉に一変させた生活思想』(暮らしの手帖 保存版Ⅲ 2004)

『花森安治伝 日本の暮らしをかえた男』(津野梅太郎 新潮文庫 2016)

『花森安治 美しい“暮らし”の創始者』(文藝別冊 KAWADE 夢ムック 河出書房新社 2011)

第二次大戦の敗戦を機に、自らの戦争体験を深く心に刻み込んで、日本人の暮らしと思想のあり方を、一般の人々に向けた実践や表現によって、問い続け(そして真正の希望をも掲げ)、多くの人々に深い影響を与えた、偉大な創造者とでも呼べそうな人が、少数ながらいるように思う。漫画家の手塚治虫や劇作家の三好十郎はそうした人のなかで、特に私が強い関心を寄せる人だが、花森安治も、気になる存在ではあった。

私は以前『暮らしの手帖』を数年間ほど購読し(「商品テスト」の最終回となった 26 号(2007 年 2・3 月)の前後 6 年くらい)、この雑誌が生活者の視点からどう科学技術をとらえているのかを追ってみたことがある。花森安治が亡くなってすでに 20 年以上が経っていたこともあって、私の目はもっぱら誌面自体に向かっていたが、折にふれて紙面で言及される初代編集長(雑誌創始者)花森の様々な事跡から、「花森安治は市民科学者だ、と言えるのではないか」との思いが、次第に強まってきてはいた(今では「そうだ」と確信している)。

この雑誌が一時期、購読数が 100 万部に近づいたという事実は、戦後の大きな出来事の一つであると同時に、希代の編集者花森安治の思想とその実践・表現のスタイルがいかに地についた共感を呼んだかを示していると言えるだろう。この事実もずっと気になっていた私は、NHK 連続テレビ小説「とと姉ちゃん」が話題になったことも一つのきっかけで、私は 2016 年から 2017 年にかけて、上記の 3 冊を含む

花森関係の書籍を10冊ほど読んでみた。

引いて紹介したい言葉はいくらでもあり、それらが示唆するものを自分の活動にどう生かせるかを考えないではいけない、そんな事柄もいくつもある。具体的にそれを論じるのは、また別の機会に譲るとして、例えば、津野の『花森安治伝』の次のような箇所を、皆さんはどう受けとめるだろうか。

「頭だけでなく体も使って、ようするにプロの学者とはべつのやり方で研究してゆく。そういう場をつくりたい。もしそれが実現できれば「個人」としての戦後のじぶんが、戦中の、頭に血がのぼった「民族」や「国民」としてのじぶんに対して立つことができるかもしれない。

どんなに深々と悩んでいても、かれは内向しない。具体的なプランがたちまち思い浮かび、あとはそのプランの実現にのこりの人生をかけて集中する。そういう離れわざができてしまう。そこに花森安治という人の力があった。」(なぜ「衣裳研究所」だったのか 233-234 ページ)

どうだろう、改めてこの人の足跡をたどってみたいくなるのではないか。上記3冊はその好適な案内になると思う。

2◆G.スタイナー『師弟のまじわり』(岩波書店 2011)、同『私の書かれなかった本』(みすず書房 2009)

この著者の本を“おすすめ”にしてよいものかどうか。

というのは、私はこの高名な評論家の本が翻訳で出るたびになんとか買い求め一翻訳がなかなか出ないので原著を買ったものも3冊ある一、難しくて読み残した部分もそこいらにあるにしても、折に触れて好きな部分や気になる所を読み返してきて、20年に及ぶ、といった個人的思い出があるからで、スタイナーの本が万人向けとはとても思えないからだ。スタイナーの書くものの大きな特徴は、文芸や哲学や文明史全般にわたる一自然科学の先端的な動向をも独自の視角から大掴みしようと果敢に挑むことがある一信じたがたいほどの博覧強記と自在な言及が、強い探究心と問題意識に裏打ちされていて(問題の核心に迫るユニークなテーマ設定自体がすでに面白い)、非常に高度で微に入り細を穿つような内容であるにもかかわらず、論じる対象を追いついていく精密で白熱した筆致のせいで、ぐいぐいと引き込まれ、読み終えた時には打ちのめされたような感じになる、ということだろうか。

前者の『師弟のまじわり』は、論じられている、ソクラテスとプラトン、ダンテとウェルギリウス、ティコ・ブラーエとケプラー、フッサールとハイデガー……等々の名一「索引」でチェックしてみてください一のいずれかに多少関心があり、“偉大な教師”という存在の、あるいは“教える・教えられる”ことの、意味を深く考えてみたい人には、抜群に面白い読み物になっていくことは保証する。

後者はじつは、前者と深い関係をもつ一章がある(「妬みについて」)。前者は通読がふさわしい書物だが、後者はそれぞれの章を拾い読みしてもまったく問題はない。「このテーマで本が書きたかったのになぜ書けなかったか(書かずにきたのか)」を論じるなどというのは不遜なことに思えるかもしれないが、読み終わっての印象はまったく逆だ。人生の経験の一回性を、あり得たかもしれない「別の人生」の可能性と合わせて深く思いをめぐらせてみるなら、自分にとっての「欠落」「否定」「失敗」とは何であったのかを、とらえようとしてとらえきれない自分を見出すことになりはしないか。経験が痛烈であればあるほど、その意味を言語化して(他者に向けて)表明することが、難しいものとなりはしないか。こ

の本はどの章も普遍的な問題を扱いながらも、著者の個人史を織り合わせることで、今述べたような苦い思いが滲み出てくる、という印象を与える。ただ、個別にみると、例えば、ジョセフ・ニーダムを論じた章（「中国趣味について」）は科学史に、動物と人間の関係を論じた章（「人間と動物について」）は動物愛護に、そして「学校教育について」と題した章は教育の国際比較や科学リテラシーに、それぞれ関心がある人に、思考を刺激してやまない一編となっている。また、性愛における言語表出を論じた章（「エロスの舌語」）は自己の性体験をあからさまに語りつつそれを精細に分析しているが、R.ローズ（大作『原子爆弾の誕生』の著者であるノンフィクション作家）の『メイキング・ラヴ』と双璧をなす奇作と言うべきか。なんとも驚くべき知性の発動ぶりではある。

3◆上田真樹 [童声\(女声\)合唱組曲「あめつちのうた」](#) 飯盛泰次郎（指揮）東京少年少女合唱隊 他

木下牧子 [無伴奏作品集「祝福」](#) 大阪ハインリッヒシュッツ合唱団

[D.スカララッティ 作品集](#) クレア・ファンチ（ピアノ）

[N.カプースチン ピアノソナタ第1番ほか](#) ユ・ソンヒ（ピアノ）

音楽の楽しみ方はいろいろある。歌を歌う、楽器を演奏する、演奏会に聴きに行く、CD やラジオで録音を聴く、といったところが一般的だろうが、楽譜を読む、音楽史や伝記の本を読む、専門の楽曲分析を繙く、そして作曲する、というものもある。

普段クラシック音楽をあまり聴かない人にとっても、無条件に楽しんでもらえる「クラシックの楽しみ方」には何があるだろう……と考えてみて、2017年にしばしば耳を傾けた音楽のことを思い返して、ハタと気付いたことがある。

「カラオケ」を愛好する人が多いことから推察できるように、誰にとっても可能で、全身で音楽の楽しさを体感できる行為は、自ら歌うことであり、それを最も強く経験するのは、合唱であろう。ただし条件があって、合唱されるその曲は、多くの人が口ずさめる童謡や唱歌のように、なじみやすく記憶に残りやすい、よい意味でシンプルな、それでいて美しい、言葉（詩）とメロディーと和声で作られていなければならない。

2017年に、今は亡き中田喜直の伝記『夏がくれば思い出す一評伝 中田喜直』（牛山剛・著、新潮社2009）を読み、この「夏の思い出」「雪の降る町を」の作曲家が編集した『20世紀の童謡110曲選』（河合楽器製作所・出版事業部2001）に手にして、そこに上げられている歌をたどりながら、“愛唱”すること・されることの意味を改めて考えることとなった。

この日本で合唱に親しんでいる人にはすでによく知られている作曲家だが、私が2017年に聴いたなかで、愛唱される曲作りという点で注目すべき現役作曲家と言える二人が、この木下牧子と上田真樹だろう。ここにあげたCDのなかのいくつかの曲はこれからもずっと歌い続けられるのではないかな。

もう一つ、対照的だが、これまた音楽のジャンルを超えて、無条件に愉悅に浸ることができる楽しみ方があると思う。超絶的な名人芸がいとまさりと披露されていて、奏でられる音楽も、もってまわった所、押しつけがまし所、曰くありがた素振り、がまったくなく、その際だった運動性（メカニカルな感じ）と流動性のおかげで、あれとあれよという間に、音楽の波に乗せられ押し流されていく……とい

った類いの音楽を聴くことだ。(弾けたらもっと心地よいかもしれないが、相当な技量がないと無理でしょう。)

そんな音楽の両横綱と私が考えているのが、イタリアの作曲家 D.スカルラッティ (Domenico Scarlatti, 1685-1757) のソナタ (一楽章形式で 555 曲もある) と現役の (高齢だが自作自演 CD も多い) ロシアの作曲家 N.カプースチン (Nikolai Girshevich Kapustin, 1937-) のピアノ曲だ。私がグダグダ言わなくても、幸い、上記 CD のプロモーションを兼ねていると思われる、演奏家ご本人が登場する動画があるので、ご覧いただければと思う。

[Claire Huangci - Scarlatti Sonatas](#)

[Sun Hee You Nikolai Kapustin & Franz Schubert](#)

スカルラッティのソナタ集は何人かの著名なピアニストが数曲から 10 数曲を選んで弾いてそれぞれ見事な CD を出しているが、ファンチの演奏はそれらと比べてもまったくひけをとらないばかりか一信じがたいほど軽やかな弾きっぷりで聴いたらびっくりするでしょう。選んだ曲を自分なりにいくつかのユニットに分け、意味づけしている点でもユニークだ。以前、スコット・ロス (Scott Ross) がチェンバロで奏でた全曲集 (CD が 34 枚 (!) のボックスセット) を聴いてきた私には、ファンチの選曲と構成がとても面白く感じられる。

ユ・ソンヒの演奏は、カプースチンのピアノ曲の、様々なピアニストによる演奏—その中では、英国のピアニスト、スティーヴン・オズボーン (Steven Osborne) の 1 枚が私を開眼させてくれたことで思い出深いのですが—と比べて突出しているというわけではないが、これまた軽やかな推進力が魅力的で、初めてカプースチンを聴く人にはもってこいの 1 枚になっている。

それにしてもこのロシアの作曲家、音楽のスタイルは「超精密なジャズ」といった感じなのだが、20 世紀のロシアの音楽史のなかの突然変異としか思えない。なぜこんな孤立現象が起こったのか、とても不思議だ。